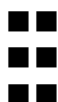


2006年9月6日 ETIC.mailmagazine ～プロを目指す学生達～

ETIC.mailmagazine ～プロを目指す学生たち～

2006. 9. 06 Vol. 142-1 (全3話)



～より高みへ、そして目標をこの手に～

- 桑野 友佳 (くわの ともか) さん
- 所属  
一橋大学 4年  
株式会社 ガイアックス内定 (兼インターン生)

プロフィール

1982年 福岡生まれ  
2002年 一橋大学入学  
2004年 1年間の休学(カンボジアへ)  
2005年 復学  
現在 大学での勉強と並行して  
(株)ガイアックスで社会貢献分野の  
新規事業リーダーを務める

【本号のポイント】

今回登場してくれるのは桑野友佳さんという大学生です。  
女性らしい出で立ちに、落ち着いた雰囲気をもった彼女は  
見た目に反してアクティブな人でした。

これまで、議員インターシップをしたり  
海外ボランティアに参加したり

その活動範囲は非常に広いものです。

しかし、そんな、  
何でもそつなくこなしてしまいそうな彼女だって  
これまで失敗や弱気になることはありました。

そんな時、桑野さんはどうやって弱い自分を奮い立たせて  
高い目標に到達してきたのでしょうか。  
どんな経緯で輝いて働ける今の場所を見つけたのでしょうか。

これから見ていくことにしましょう。

○第1話：優等生・桑野の挫折

○第2話：いいふらし

○第3話：自分で切り開く道

---

～第1話～ 優等生・桑野の挫折

---



■ ■ プロローグ



先日、WBC世界ライトフライ級世界王者になった  
亀田興毅という男がいる。

彼は、マスコミからの評判が凄く良い。  
なぜなら、人々の気を引く強気のコメントをいくらでも  
提供してくれるからだ。

「ビッグ・マウス」という代名詞をもつ彼が  
強気のコメントをするのには、もちろんファンサービスや

世間の注目度を高めるといった理由があるにちがいない。

ただ、私は思う。  
世界チャンピオンになった彼にとって、  
これまで口にしてきた多くの言葉は、もしかすると  
もっとずっと深くて重要な役割を果たしてきたもので  
あったりするのではないかと……

今回の話の主人公である桑野友佳さんは、  
亀田選手とは直接関係はない。  
ただ、その女性らしい風貌の中に潜ませている  
「自分の理想化」テクニックは  
あのイカツイ亀田選手をもKOしかねない程、  
巧みなものかもしれない。

現在、自分に合った仕事を見つけ  
生き活きと働いている桑野さん。

彼女は、自分の夢をどのように見つけ、  
どうやってアプローチしていったのか。  
彼女のこれまでの道のりを遡っていきたいと思う。



## 最初の夢

桑野は福岡で生まれた。  
それからすぐに、親の仕事の都合で九州・四国・沖縄を  
転々とするようになった。  
その間、なんと小学校を4つ、中学校を2つ経験。

福岡の学校の厳しい規律の中で勉強したり  
沖縄の学校の大らかな雰囲気の中で、自由に遊びまわったり、  
桑野は固定観念に囚われることのない  
広い価値観を身に付けていった。

何度か転校を繰り返す中でも、  
与えられた仕事はきちんとするし、  
ひたすら勉強も頑張る桑野は、しっかりと  
自分の存在を示していた。  
そのため、どこに行っても学級委員を任されるような  
まさに絵に描いたような優等生だった。

そんな彼女が最初に抱いた夢。

それはピアノの先生だった。  
幼い頃から本格的にピアノを習い、  
高校へも「音大に行きたい」と推薦入試の面接で  
宣言して入ったほど、桑野の夢はハッキリしていた。

しかし、桑野のその夢は叶うことはなかった。

高校2年の時。  
大事なコンクールで、覚えていた楽譜を  
すべて忘れてしまうという大失態を犯してしまったのだ。

「どうしよう……」

その時、頭は真っ白。  
桑野は体中から血の気がひき、立つもやっとの状態だった。  
茫然自失(ぼうぜんじしつ)で舞台袖に引きあげる際、  
あるはずの拍手はなく

代わりにそこにあったのは、  
凍てつくほど冷たい会場の雰囲気だった。

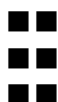
初めて味わった挫折だった。  
それまでは勉強だって何だって、完璧にこなせると  
思っていた。  
「失敗」なんて自分には無縁なものだと思っていた。

「まさかこんな結果になるなんて……  
音楽はもう無理だ」

桑野はこのとき、自分の弱さを知った。

以降、ピアノを弾くことが怖くなってしまった。  
それまでの人生の大半をかけてきたピアノ。

桑野はそれを手放したのだった。



## 「なぜ」からの道

それまではずっとピアノが生活の中心にあった。  
しかし、今はもうない。

「私がやりたいことって他にないのかなあ……」

漠然とそう思いながら過ごしていた。

そんなある日。  
高校で生徒会に入っていた桑野は、卒業文集の編集担当になった。

その仕事とは、高校のOBにあたる人を取材し、

記事を書けるといふものであった。  
取材することになったのは中村哲というお医者さん。

その人は、アフガニスタン国境に近いパキスタンの街、  
ペシャワールという所で、ハンセン病を中心とした  
アフガン難民の診療に携わっているという。

アフガニスタンとパキスタンの境目なんて  
これ以上ないほど危険な地域である。  
彼はそんな所で、決して高いとはいえない給料で、  
さらには、日本に家族を置き去りにしてまで  
現地の支援に身を投じていた。

「なぜ、この人は海外の見ず知らずの人々のために  
ここまで自分の人生を捧げることができるのだろう？」

この時、桑野の心に素朴な疑問が生まれた。

取材後、中村氏が書いた本を読んだり、  
NGOや海外ボランティアと題打たれた講演会に  
率先して参加してみた。

しかし、やはりどうしても「そこまでの理由」がわからない。

「これは体験してみないとわからないことなのかもしれない。  
それなら、実際に海外ボランティアに行ってみよう！」

高校3年生の桑野は、  
純粋で真っ直ぐな好奇心と大胆な決断力の持ち主だった。  
ピアノの先生が夢だった彼女は  
いつしか新しい道を歩もうとしていた。

---

## ～第2話～ いいふらし

---

■■  
■■ いいふらし  
■■

卒業文集の制作に関わったことがキッカケで、  
NGO活動や海外ボランティアに興味を持ち始めた桑野。

これらについて詳しく調べそうな  
一橋大学社会学部への受験を決意した。

「やるからには上を目指したい！」

そんな考えの元、自分の実力よりも  
数ランク上の大学を目標に勉強に励んだ。

しかし、結果はやはり不合格。

その後、浪人することとなってしまった。  
ただ、桑野には浪人すれば確実に受かるというほど  
余裕はなかった。

「弱い自分に勝つって難しいことだよなあ。  
でも、どうしても自分で立てた目標を達成したい。」

桑野は考えた。  
そして、なんとかモチベーションを上げるため、  
希望の大学に受かるため、  
彼女は1つのアイデアを思いつく。

「みんなに前もって自分の目標を言いふらして、  
受からないと生きていけないくらいの状況を作り出そう！」

その日から桑野は、行く先行く先で  
「一橋大学へ行く」  
という目標を意識的に口にするようになった。  
自分を敢えて窮地へ追い込んだのだ。

「これだけ皆に言いふらしているのだから  
何が何でも合格しなきゃ！」

一橋大学へ行くことは、いつしか桑野の使命になっていた。

さらに桑野のこの行動には思わぬ特典もついてきた。  
ただ単に桑野自身のモチベーションが上がっただけでなく、  
気がつけば、周囲には同じ志を持った意識の高い仲間たちが  
集まっていたのだ。

意識も環境も向上。  
かくして、桑野は見事、宣言どおりの現実を手に入れたのであった。

■■■  
■■■ 気になったら即行動してみる  
■■■

念願の大学へ入学！

そこまでは、よかったものの  
1年生の間は特に何をしたということもなく、  
ただ時間だけが過ぎていった。

「海外ボランティアで働いてみたい」  
という気持ちを忘れていたわけではなかった。  
しかし、通常、海外でNGO活動をするには  
「実務経験3年以上」であったり  
「TOEICのスコアがある一定以上」といった資格が必要である。

そういった資格条件を前に桑野は、足踏みをしてしまっていた。

大学の1年次なんて教養課程で面白みを感じない。  
テレビのリモコン片手に1日中家にいる日も度々あった。

そんな緊張の糸が切れた生活をしていた折、  
桑野は郵便物の中から1枚のハガキを手にする。  
それは選挙の投票ハガキだった。

「そっか！私今年20歳だから、これから選挙権があるんだ！」

誰もが体験するであろう、些細な感動の瞬間である。  
ただ、桑野は同時に1つ疑問も抱いた。

「選挙に行けるのはいいけど、誰に投票したらいいんだろう？  
そういえば、全くわからない」

何か引っかかるのは裏を返せば、興味があるということ。

「それなら、実際に議員さんの所でインターンシップをして  
政治の世界を体験してみよう！  
そうすればきっと答えは見えてくるに違いない」

桑野の反応は早かった。  
春休みの3ヶ月間を前半と後半に分けて、  
衆議院議員と地方議員の事務所、  
計2箇所インターンシップをすることにした。

まず初めに行ったのが、衆議院議員事務所。  
そこでの仕事とは、電話の取次ぎや議員さんの忘れ物を  
議会まで届けるというものだった。

「ん～なんかイメージしていたものと違うなあ。  
まだ1ヶ月も働いていないインターンシップ生の私だし  
出来る仕事なんて限られているか……」

国会議事堂に入れたり、テレビで目にする議員さんに  
会えたりそれなりに面白い経験はあった。  
しかし、桑野の好奇心を本当の意味で満たすものは  
そこにはなかった。

続いて向かった地方議員事務所。

「また電話対応や、雑用とかなんだらうなあ……  
あまり気は乗らないけれど、あと1ヶ月の辛抱！  
なんとか頑張ろう」

そんな後向きな気持ちで臨んだ桑野を待っていたのは  
予想もしない環境だった。  
というのも、「地方議員事務所」にインターンすることにな  
ってはいたはずだが、そこは、肝心の事務所(部屋)すら  
未だ見つかっていないという状況だった。

全く何もない状態で、まず初めにしたことといえば、  
やはり事務所として使う物件探しであった。  
そして、事務所が見つかった後は、机を入れたり

電話線を引いたり、まさに選挙を行う前の体制作りから手伝うことになった。

そんな通常では体験することはまずないような仕事から始まったインターンシップ。  
最終的にはなんと、選挙でその議員さんが  
トップ当選を果たすのを目にすることとなったのだった。

「普段は当たり前のように目にしている景色でも  
その裏側にはそれを支える多くの人々が存在しているんだ！  
そして、何よりもゼロから何かを作り上げることって  
こんなにも楽しいことなんだ。」

「政治について詳しくなりたい」  
と踏み出したはずの議員インターンシップ。  
しかしそこで桑野が学んだのは、意外にも別のことだった。

■■  
■■ 目標へ導いてくれる「アレ」  
■■

大学も2年生になり、桑野はいよいよずっと気にかかっていた海外ボランティアについて現実的に意識し始めた。

ボランティアに行くなら1年は行くつもりであった。  
そうすると、ある程度の資金が必要となる。

「まずはお金を貯めなくちゃ！」

そう考え、アルバイトをすることにした。

家庭教師や塾の講師に始まり、一見、桑野の雰囲気からはイメージし難い、居酒屋店員やキャンペンガールまで  
思いつくものを片っ端から経験してみた。

来る日も来る日もバイト付けの日々だった。

さらに、1年以上ボランティアに行くには  
学校を休学する必要もあった。  
そのためには、いくつかの面倒な手続きも

取らなくてはならなくなる。

「海外での1年分の生活費を貯めるのはこんなにも大変だし、  
いざ行くとしたら、色々手続きも大変そうだし  
海外ボランティアに行くのなんて辞めちゃおう。」

何度もそう思った。

しかし、ここでも気持ちを支えてくれたのは  
高校受験を乗り越える勝因となった「アレ」であった。

「私、海外でボランティア活動に参加したいんです。  
その為に今頑張っているんです！応援してくださいね！」

国会議員、地方議員事務所にインターンシップ中も、  
そしてバイト先でもずっとそう口にしていた。

桑野の公言は、桑野の目標でもあった。

それを人に言うことは、当然プレッシャーにもなる。  
しかし桑野は、上手く弱い自分の背中を押してくれる味方として  
活用していたのである。

そんなある日。

桑野はこの日から、新しいバイト先に入るようになっていた。  
初日はまず顔合わせとのこと。  
桑野は自己紹介と合わせていつものように  
自分の「海外でのボランティアに行きたい」という想いを伝えた。

すると、桑野にとって値千金の返事が返ってきたのだった。

「そうなの！？  
実は僕、カンボジアでボランティア活動を  
していたんですよ！」

なんと、「カンボジアの村を支援する会」というNGOに参加して  
海外ボランティアをしていた人がいたのだ。  
詳しく話を聞いてみると、そのNGO活動への参加条件は

現地で自分が生活していく費用さえ自己負担できれば資格などは全くいらならしい。

「これって私にとって、すごいチャンスじゃないの？  
行くしかない！」

目の前にはっきりとした道を見つけた桑野。  
弱音なんて吹き飛ばし、なんとか費用を貯め、  
休学の手続きも済ませた。

「さあ、カンボジアへ行こう！」

桑野の「いいふらし」は  
いつしか桑野自身の未来を切り開く確かな原動力となっていた。

---

～第3話～ 自分で切り開く道

---



■ ■ NGO活動inカンボジア



念願の海外ボランティアスタッフとして  
カンボジアの地へ足を踏み入れた桑野。  
胸中は期待でいっぱいだった。

カンボジアには地雷障害者の人々が沢山いる。  
その地雷障害者の人々が  
世界遺産であるアンコールワットのある街へ  
集まってくるのである。

理由は観光客に物乞いをするため。

桑野が参加するNGO、「カンボジアの村を支援する会」は  
こういった地雷障害者の人々を家族単位で受け入れ  
自立のための支援を行っていた。

家族単位での自立とは、  
親はトレーニングセンターで農業を身に付けてもらい、  
子供には学校(子供センター)で英語や日本語、

時にはマナーや調理技術を学び、  
将来、観光施設などで働いていけるようになって  
もらうことであった。

最初は右も左もわからなかった。  
裸で遊んでいる泥だらけの子供たちが寄ってくるのにも  
抵抗があった。

「私、本当にこんなところでやっていけるの!？」

不安な気持ちからのスタートだった。

しかし、いつまでも日本との環境の違いに  
戸惑ってばかりもいられない。

桑野は、以前から滞在しているスタッフの後ろからついて回り  
率先して子供たちと話したり、  
市場へ買い物に出かけて現地住民の人々と  
コミュニケーションをとるよう努めた。

3ヵ月後。  
積極的に現地の人々と交流をしてきた努力の甲斐あって  
桑野は、現地の環境にもだいぶ慣れ、日常会話にも  
困ることはなくなってきていた。  
生活に余裕が出るにつれ、  
現地の貧富の格差や教育事情の悲惨な状況の中で  
自分達が行っているボランティア活動の必要性ややりがいを感じていた。

ただ、桑野にはそれ以上に  
強く問題に感じ始めていたことがあった。

それは、桑野がいたNGOでの活動費用がすべて自己負担の為、  
スタッフの大半が3~6ヶ月で帰ってしまうということ。  
桑野のように1年間いるのは珍しいことであった。

「こんな資金面で優遇の少ないNGOの活動では  
どうしても限界があるよ……」

仮に給料が出ている他のNGOを例にとってみても、  
貰えてもせいぜい年収250万というのが平均的なところ。

それは、お世辞にも十分な額と言えるものではなかった。

日本ではNGO活動に対する認知度も高くなっていたり法律の整備も結構確立されてきていると言われている。でも、桑野が現地で直接肌で感じたのは、NGOに対する支援がまだまだ全然足りないという厳しい事実だった。

桑野は思った。

「私は海外でのボランティアやNGO活動に直接関わるというよりは、それを支える根本的な仕組みの方に目が向いてしまう。意外にも、この点に疑問を持っている人は少ないみたいだし、これらが改善される方向へ向かうような何かをしてみたい」

1年間ボランティア活動を行っていく中で、この思いは少しずつ大きくなっていった。しかし、このとき桑野は、自分に何が出来るかは思いつかなかった。



## 自分に合った仕事

1年後。  
ボランティア活動の実情を直接目にして体験できた充実感と大きな問題意識を胸にカンボジアから帰ってきた桑野。大学の3年次ということもあって周囲の学生たちと同様に就職活動に励むこととなった。

これまで、関心をもったことには何にでも飛びついてきた。桑野はその経験から1つの想いを持っていた。

「大企業という統率の取れた組織の中で決められた役割を果たすのも立派な仕事にちがいない。でも、私は自分で高い位置に目標を定め、自分で何かを切り開いてゼロから作り上げていくほうが合っている気がする！」

そこで、就職活動は大企業に比べ個々の自主性を重視してくれるベンチャー企業を中心に受けて回った。

そして、いくつか受けて回っている中で、  
ガイアックスというITベンチャー企業と出会うこととなった。  
例のおり説明会を聞いてみたのだが、  
そこでは桑野の気を引くこんな意外な言葉を耳にした。

「うちの会社では  
今、社会貢献事業を始めようと思っているんです。」

桑野は思った。

「ん！？  
ITベンチャーが行う社会貢献事業ってなんだろう？」

説明会の後、すぐさま話しをしてくれた社員さんの元に歩み寄り、  
尋ねてみた。

「ITベンチャーのする社会貢献事業ってどんなものなんですか？  
私、カンボジアでボランティア活動していたこともあって  
そういったことに凄く興味あるんですよ！」

現在、海外で活動しているNGOは人手や資金不足にあること、  
もっと情報公開の必要があること。  
桑野はカンボジアでのNGO活動の現状や  
自分の抱いた問題意識を話してみた。

すると、  
「是非ともこれから始める企画の参考にしたい！  
もっと詳しく聞かせてくれないかな」  
社員の人は桑野の話に凄く真剣に耳を傾けてくれていた。

桑野はその態度に驚いた。

「私のようなイチ学生の話を実際に聞いてくれ、  
そこから新しい事業がスタートしようとしている。  
こんな魅力的なこと他の会社にはきっとないはず。  
是非、参加してみたい！」

ゼロからの出発、ずっと心に引っかかっていたNGOの問題点。

桑野にとって、これ以上はないという条件が揃っていた。

全く迷いはなかった。

エントリーシートに

「これから始まるという新事業、是非参加させてほしいです！」

桑野は自身の強い想いを書いた。

そして3月末。

桑野の元に、採用を伝える電話が鳴ったのだった。



■ ■ 現在(いま)



現在、桑野はガイアックスの新プロジェクトでメンバーを率いるリーダーとなっている。

その新プロジェクトとは、NGO・NPOにブログのポータルサイトを無料で提供するというもの。

「情報発信という観点から資金不足・人手不足を解消できないものかな」

桑野は日々、そう追及しているのである。

本来、正式な入社というのは4年次が終わり卒業式を迎えた春の時期となる。しかし、これから4年次を迎える桑野にはある想いがあった。

「どうせやるなら議員インターシップで経験した時のようにゼロから参加し、1つのことを成し遂げたい。せっかく目の前にそのチャンスがあんだから、今やらなきゃ！」

熱い想いに動かされた桑野は、内定が決まった後、すぐプロジェクト参加を希望したのだった。

インタビューの間に桑野が覗かせる表情は、凄く輝いていた。それは、きっと、こういった彼女の「やりたい」という気持ちに真っ直向かっているという充実感の現われなのだろう。

今後、彼女の見つめる先に  
どんな高い目標を掲げられるのか、期待せずにはいられない。

## ■ ■ エピローグ ■ ■

人は誰しも、  
「こうしてみたい・こうなりたい」  
という目標を頭に描くものだ。  
しかし、それを実現することは容易なことではない。

世の中で、成功していて輝いている人々は一見、  
すんなりとその成功を手に入れたように見えるかもしれない。  
挫折なんて知らないように見えるかもしれない。

しかし、決してそんなことはないだろう。

どんな人間だろうとも、弱い自分に勝つために工夫し

予想とは必ずしも一致しない結末に合わせながら、  
考えながら、生きているのではないだろうか。

今回の主人公、桑野さんは  
目標へ自分を近づける上手なイチ例を示してくれたと思う。

有言実行

自分の発言を使命に感じられたとき、  
遠かったはずの目標は  
もう、すぐそこまで来ているのかもしれない。

終わり  
(文中敬称略)

---

【編集後記】

最後までお読みいただき、ありがとうございます。  
今号を担当したライターの照屋逸郎です。  
桑野さんのストーリーいかがでしたでしょうか？

興味を持ったことにはためらう事なく挑戦し、  
強い意志を持って人生を歩んできた桑野さん。

そうした彼女の道のりの支えにあったものは  
「いいふらし」という武器ではないでしょうか。  
私はインタビューをさせてもらって、  
自分の気持ちを鼓舞させて努力し、そして目標を掴みとるという点は  
まさにボクシングの亀田選手と相通ずるものがあるな、と感じました。

ひょっとすると、桑野さんが社会貢献事業のチャンピオンになる日も  
近いのかもしれませんがね。  
期待しています。

ただ目標を立てるのは簡単ですが、  
それをしっかり実現するのは凄く難しいもの。  
何事も3日坊主の私にとって  
桑野さんの生き方は凄く参考になるものでした。

読者の皆さんも、「自分のしたいこと・自分の目標」を  
思い切って周囲に高々と公言してみてはいかがですか？  
もしかすると、その行動があなたをより高い位置へ  
導いてくれるかもしれませんよ。

最後になりますが、お忙しい中、  
取材や確認作業に快く協力してくださった桑野さんに  
この場をお借りして、心よりお礼を申し上げます。  
本当にありがとうございました。

ライター：照屋 逸郎